



－「つながる力」で学校と地域に活力を与える－ コミュニティ・スクール導入の動き加速！

人口減少や少子高齢化が進む中、学校と地域に「つながる力」をもたらし、双方に活力を与える可能性を秘めた仕組みとして注目を集めるのが「コミュニティ・スクール(学校運営協議会制度：以下、CS)」です。南管内では今、CS導入の動きが加速しています。

湯沢市と羽後町は、平成30年度に域内の一部の学校でCSを先行導入し、令和2年度に残り全ての小・中学校でCSを導入しました。

横手市は、昨年度に十文字地区と増田地区の小・中学校をCSモデル校として導入の準備を進め、今年度に入り市内全ての小・中学校でCSを導入しています。

また、大仙市は今年度、太田地区の小・中学校でCSを先行導入し、仙北市も今年度から西明寺小・中学校をモデル校としてCS導入に向けた準備を進めています。

既にCSを導入した学校からは、「学校運営協議会」での話し合いをもとに、担い手不足に悩む地元基幹産業の職場体験を新たに実施したり、コロナ禍でマスク不足になった時、学校運営協議会委員の尽力により地元縫製会社から子どもたちにマスクが調達されたりといった事例が報告されています。これらは、CSによる「つながる力」がもたらした好事例といえます。

CSには、「社会に開かれた教育課程」の実現を下支えする組織としての役割や、将来的には教職員の多忙化軽減のための機能など、様々な効果が期待されています。

CS導入により、今後学校と地域でどのような‘化学反応’が生み出されるのかとても楽しみです。



西明寺小・中学校の「熟議」の様子

アドバイザーコラム：学校・家庭・地域の連携・協働 19

進化する「ふるさと教育」③

社会教育アドバイザー 小笠原 重夫

本県の「ふるさと教育」が始まってから、来年度で30年を迎えます。

近年は「〇〇学」や「プロジェクト〇〇」と称して、学習の成果を地域活性化に活かそうとする学校が増えています。

羽後町の羽後高校では、「羽後学」を通して地域の文化や歴史、産業を学び、地域活性化に寄与する取組を行っています。

羽後高校は昨秋、「道の駅うご」と連携しながら、西馬音内盆踊りをモチーフにした「盆踊りクッキー」を商品化し、新たな土産品として西馬音内盆踊りの知名度アップを図りました。同校の生活文化コースの生徒たちと道の駅は、平成28年から協力して商品開発に取り組んでいるそうです。

一方、羽後中学校は、総合的な学習の時間で行う「プロジェクトU」によって、地域の賑わい創出や活性化に貢献する取組を行っています。

羽後中学校は昨秋、「秋田活性化中学生選手権全県大会」に県南代表として出場し、道の駅を拠点とした地域活性化案を発表しましたが、昨年度は道の駅のイベントに参画し、地元の商店等とコラボした「チーズまんじゅう」を販売したり、地元特産の蕎麦の実を使った独自ブランドのアクセサリーを販売したりしました。

両校とも、授業を通して人口減少など地域が抱える問題を見詰め、持続可能な地域にしようと特産品の商品化につなげた、生徒たちの瑞々しい感性と地域の協力が光りました。

昨年の12月に開催された羽後中学校の「学校運営協議会」を参観させていただいた時には、グループ協議の中で「羽後学」と「プロジェクトU」の連携にも話が及んでいました。もし、そのコラボができたなら、持続可能な地域づくりに向けた大きな力となるに違いありません。